

創造的学習のための日本史教育

白根 靖大

Creative Aspect on Education of Japanese History

Yasuhiro SHIRANE

(2002年11月29日受理)

To develop students' ability to create, it's important to train every aspect of their viewpoints and way of thinking. As a role of education of history of college of technology, we cultivate a better understanding of our contemporary society and culture, which enables the students to solve a problem in the long perspective. Developing of their autonomy is also requisite for their ability to create, so we inspire them to have their own question, to inquire into the detail, and answer it by themselves in our classes. To measure their academic achievement, we adopt an essay-type examination and individual researches. The program in our classes gives rise not only to develop a way of thinking in history but also to train students' ability to widen their intellectual outlook. If they can use the ability to widen the way of thinking in their specialized area, it will have an good influence in their creative study.

はじめに

工学を専門とする高専において、人文科学系の科目は、「学生に豊かな知識と教養を身につけさせ人間形成の基盤を作ることと、専門教育を受けるのに必要な学問的な基礎を修得させること」¹⁾とされている。その中であって、日本史は、日本社会の成り立ちや文化の淵源を学びながら「豊かな知識と教養を身につけさせ」る役割を果たす。だが、「社会科が苦手だから高専を選んだ」という学生も少なくない高専では、日本史＝暗記科目という認識で終わってしまう憾みがあり、それは日本史学習の初歩でとどまっていることを意味する。

こうした現状を克服し、「専門教育を受けるのに必要な学問的な基礎を修得」し得るものとして、日本史という科目の持つ意義を示そうと、筆者は、試行錯誤を重ねながら、独自の教育プログラムを構築してきた。それは、工学を専門とする学生にとって、日本史でなければ身に付かない素養は何なのか、ということ意識したものである。

本稿では、高専生の「創造力」育成を念頭におきながら、3年生を対象に行っている授業実践を通し、日本史教育の意義について論じたい。

1 教育計画

1.1 教育目標

創造力を育む要素の1つとして、多面的なものの見方・考え方を養うことが挙げられる。工学を専門とする高専において、歴史教育は、現代の社会や文化をより根源的に理解する力や、デジタルな考え方では解けない問題を解決する思考力を養い、学生の視野を広げるのに大きな役割を果たす。

詳しくいえば、まず、時間軸をもって物事をとらえる力、中・長期的視野を身につけることができる。これにより、過去の失敗から学び、目の前の壁を俯瞰的に見通し、歩むべき道筋を自らの力で開拓していくことが可能となる。それは在学中の日々の勉強から卒業研究まで、ひいては社会に出てからの仕事においても必要な素養といえるだろう。かかる視点を持ち合わせているとしないのでは、創造力という点でも自ずから差がついてこよう。

また、私たちが生きている社会は長い歴史の積み重ねの上であり、そうした背景を踏まえていないと理解できない側面が存在する。日本には日本的な感性や文化から生み出されたものが多々あり、たとえば西洋的な感性や文化から生み出されたものをそのまま当てはめるにはそぐわない場合もある。特に、近代科学技術はその多くが欧米に端を発しており、

それを日本社会において適用する際には、一見すると対極に位置するような「歴史的視点」こそが、実は応用力につながるのではなかろうか。

さらに、時代の変わり目を物語る出来事が起っている今日、世の中の流れや方向性を察知する能力が不可欠となってきているといえる。中には、10年前の常識が通用しないことも生じてきており、それは今後ますます増えていくものと予想される。こうした流れに乗り遅れたり、方向性を見誤ったりすると、せっかく身につけた技能を社会で生かすことができなくなる恐れがある。したがって、これから社会に出ていく学生たちは、かかる能力の必要性を特に認識しなければならない。そのためには、歴史科目の重要性を理解し、表面的ではなく歴史の流れを読むことを意識しながら学習することが重要である。

以上をまとめると、①人間社会を歴史的視座から見つめ、目の前の問題解決にあたり中・長期的視点から物事を考える力を身につける、②主体的に歴史を学ぶことで時代の流れをとらえる力を養う、こうした目標を掲げて日本史教育を進めていくことが1つの方法として成り立つ。

1.2 指導計画

前述の目標を達成するために、高専生を相手にした際、最初に克服しなければならない課題がある。それは「日本史の勉強＝暗記」という先入観を壊すことである。

「入試科目に社会科がないから高専を選んだ」「暗記は苦手だから社会科は嫌いだ」というのが高専生の特色の1つといえるだろうが、それでは勉強の入り口で立ち止まっているに過ぎない。数学であれ専門科目であれ、公式や定理などの基礎的事項は「覚え」なければならないものであり、そうした知識があってこそ問題を「解く」ことが可能となる。そして、それはどんな科目にもいえることであり、日本史においても、基礎的事項を「覚え」るだけが勉強なのではなく、そこから何を「考え」どんなことを「解く」か、という段階に至ってこそ、真の意味で歴史を学んだことになる。

そこで、平素の授業では、基本的な史実を提示するのみならず、時代ごとに設定したテーマや歴史学的方法論を示すことで、科学的および論理的に考える日本史の学習を行っている。端的に言えば、歴史学習の王道という印象がある年号の暗記は求めず、史実の社会的背景や歴史的意義について考えることを要求するものである。その糸口となるのが時代ごとに設定したテーマであり、たとえば有名な人物や

歴史的トピックなどを選んでいく。また、歴史学の科学性を前面に押し出し、学生の得意な理系的視点からの照射を導入することによって、文系理系という短絡的な区別を廃すように試みている。こうして、基礎的知識をもとにテーマに沿った問題を考え、今日の私たちが学ぶべき点などについて明らかにし、歴史に対する見方・考え方を養うのである。

次に、こうした学習方法を学生各人が確認する意味も込めて、論述式の試験を実施している。具体的には、制限字数内での人物説明、歴史的事項の簡単な証明、史実を材料にした時代像の復元、設定されたテーマに沿った小論文といったものであり、詳しくは後述する。特に、最初の試験はそのほとんどを論述式で行い、日本史の試験に対する一般的なあるいは高校的なイメージをまずは払拭する。この方式は、同時に、表現力の育成という狙いも含んでいる。そのうえで、知識力や思考力を総合的に問う試験に移行し、バランスのとれた認識の獲得を目指していくことになる。

以上の成果を踏まえ、各人の興味・関心に沿ってテーマを設定する自由研究レポートを実施し、文献調査やフィールドワークなどを通じた歴史資料調査および収集を行い、自分なりの分析・考察を経て、自らテーマとした課題に対する結論をまとめさせる。これは授業で習得した知識や方法論の実践であるとともに、自ら課題を設定しそれを解決し、さらにその結果を報告するという、いわば「実習」である。教室を離れかつ教科書を離れ、受け身ではなく主体的に取り組むことが求められるので、各人の姿勢や応用力が試されることになる。

このような計画に沿って1年間学ぶことにより、「暗記する」歴史から「考える」歴史へと認識が変わり、それが他分野で何かを考える際に歴史的視点を導入することにつながれば、視野の広い多面的な考え方を持つに至る。さすれば、それがない者に比べ、創造力という点でも一歩抜きん出ることができるとはなかろうか。

2. 実践内容

では、平成14年度前期における実践内容の紹介に移る。本稿の締切の都合で後期に触れ得ないことをあらかじめご了承願いたい。

2.1 授業概要

前期授業の単元と学習目標の一覧を掲げる。

単 元	→	学習目標
1. 旧石器・縄文時代と遺跡の発掘		→歴史の解明に果たす考古学の役割を学ぶ
2. 弥生時代の日本の解明		→歴史書の記述と考古学の成果を比較する視点を学ぶ
3. 古墳時代と大王の登場		→歴史的事実の証明法を学ぶ
4. 飛鳥時代から律令国家の形成へ		→歴史の流れの中で歴史的事実を位置づける
5. 奈良時代と奈良の大仏		→歴史的トピックから時代を探る視点を学ぶ
6. 平安時代と国風文化		→日本文化形成の歴史的背景を学ぶ
7. 古代の東北地方		→北日本から見た東北地方と秋田を学ぶ
8. 前九年・後三年の役と東北地方		→歴史的事件を地方の立場から見直す
9. 奥州藤原氏と東北地方		→地方からの視点・人物を通した歴史・考古学の成果を総合的に理解する

全体の流れを示すと、まず歴史学の科学性を理解させるために、年代測定法などで科学的分析法を用いている考古学を取り上げる。科学が直接見える事例を挙げないと、高専生は歴史学＝科学という概念を受け入れにくいようである。そのうえで、考古学の成果と歴史書の記述を結びつけ、歴史書からの分析すなわち文献史学の方法論へと導き、さらに歴史的事実の証明法を学ぶことによって、歴史学＝科学という認識にたどり着かせる。この過程を経ないと、日本史を学ぶ道先には進めない。

次なる段階は、歴史を「点」ではなく「線」もしくは「面」で見える目を養うことである。「線」でとらえる目とは、歴史の流れをつかんでその中で個々の出来事を位置づける視座である。また、「面」で見える目とは、ある事柄を通して時代の諸相を探るという奥行きのある視座を意味し、政治・経済・社会・文化などの様々な分野に広がっていく。こうした目を習得すると、それまでバラバラに覚えていた出来事や人物が有機的につながり出し、単なる知識に過ぎなかった事柄が躍動感を持つようになる。いわば、「生きた歴史」を感じられるようになるのである。

こうして2次元的に歴史をとらえられるようになったならば、今度は3次元的な視角の習得を目指すことになる。そのために、本授業では、中央から語られる歴史的事実を地方から見直すことで、同じ出来

事の異なる側面を浮き彫りにし、立体的な歴史像のとらえ方を学ぶ。具体的には、秋田や東北地方の身近な歴史を取り上げ、近年新たな進展を見せている平泉研究や奥州藤原氏研究の成果も交え、教科書の語る歴史像とは別の姿を提示することによって、多面的なものを見方を養っている。

前期の授業を通し、単なる知識として「点」の状態で「覚える」ものだった歴史が、自分たちと同じ人間が織りなした、様々な側面をもったものだという理解に変わること、これが1つの目標となる。そして、各人の興味・関心を生かした視点から、創造性をもって学習に取り組み、かかる姿勢を後期に発展させていければ成功といえよう。

2.2 評価方法

学習の評価については、中間試験・自由研究レポート・前期末試験・自己評価レポートによる。以下、その概要を提示する。

○中間試験

与えられたテーマに答える論述式。

(例) 制限字数内での人物説明。

古墳時代に実在した大王の証明。

大仏造立から見た奈良時代の様相。

秋田で発掘された遺物から再現できる縄文および弥生時代像。

○自由研究レポート

各人の興味・関心による任意のテーマを設定し、夏休みを利用して文献調査やフィールドワークなどを行う。そうした歴史資料調査および収集作業で得た史資料を分析・考察し、テーマに対する結論をまとめて提出する。

○前期末試験

知識力を問う形式と論述式の混合。

(例) 知識力：平安時代の基礎事項。

東北史の基礎事項。

東北史上の人物。

論述式：平泉で発掘された遺物からの再現。

選択式の小論文（1 東北の歴史と中央の歴史、2 人物を通した歴史、3 歴史から学ぶ現代社会）。

○自己評価レポート

後期授業初回において、前期授業概要に沿って、学生自身に理解度や到達度などについて自己分析させ、後期に臨む心構えを促す。

3 結果報告

3.1 中間試験段階での意識調査

中間試験を行った際、「今回の範囲を学んで新しい発見をしたことについて自由に述べよ」という自由記述の意識調査を実施した。本授業を受けて歴史に対する認識の変化が見られるのか否か、各人がいかなる点に着目しているのか等について知るためである。その結果、下表のような回答を得たので、その紹介と分析を行いたい。

詳しい知識の習得	43
感想	42
時代の流れを把握	20
歴史から現在や未来を考える	11
自分で調べ考える意欲	9
歴史の証明法の理解	8
身近な事柄と結びつけた視点	7
全体の中でとらえる視点	7
歴史学は科学という認識	5
外来文化の加工や固有文化との融合	5
専門と結びつけた視点	4
人物を通した歴史という視点	3
累計	164

※これは1人の回答から複数の要素を抽出した累計である。

さて、「社会科が苦手」な学生たちゆえ、「詳しい知識の習得」に属する回答が多かったのは当然といえよう。また、初めて体験するタイプの日本史の授業ということで、それにまつわる感想も目立った。そうした中、この段階で特筆すべき回答を得ているので、それらについて言及していく。

まず、「時代の流れを把握」「歴史から現在や未来を考える」である。これによれば、歴史を「線」ととらえる目を習得し、過去のみならず現在や未来へもその眼差しを向けている。教育目標の1つである「時代の流れをとらえる力を養う」ことが、ここで実を結んでいるといえよう。

また、「歴史の証明法の理解」「歴史学は科学という認識」については、歴史学＝科学という認識に至ったことを示しており、日本史学習のさらなる深化が期待できる。事実、かかる成果は、後に行われる自由研究レポートにおいて生かされることになる。他にも、「身近な事柄と結びつけた視点」「全体の中でとらえる視点」「人物を通した歴史という視点」を得た者たちがおり、最初に克服すべき「日本史の勉強＝暗記」からの脱却へ向かっているとみてよい。

さらに、高専教育における一般科目の役割という

点で注目できるのが、①「自分で調べ考える意識」②「専門と結びつけた視点」であろう。これらについては、実際に学生が書いた文章から、一部ではあるが事例を掲げることにする。

①「今の研究でわかっていることを参考にして、自分で考えていくことが新しい発見だった」

「今不便に思っていることを物を買って解決するのではなく、どうすれば楽になるかをじっくりと時間をかけて自分自身でその答を出せるようになろうと思った」

「何もないところから自分たちで道具を作り、家を造り、食べるものまで変わっていくという進化に興味を持ったので、もっと詳しく調べてみようと思う」

②「さびやすく融点の高い鉄を当時の技術で剣などにできたのはすごいことだと思った」

「『新しい物を作る』という仕事に就いたとき、昔の人々の工夫やその意欲を見習いたい」

「自分の物質工学的研究で少しでも考古学に役立つ発見ができればいいなと思っている」

これらの意識が本授業を契機に生まれたものならば、裏を返すとそれ以前は持ち合わせていなかったということである。ならば、本授業が研究に取り組む際に求められる意識や素養を覚醒させた、といえるのではなからうか。また、自らの専門を意識させながら進めるやり方が、日本史という科目を専門教育との有機的結合を有したものにしており、単なる教養を超えた学習効果を生みだしていると考えたい。とすると、「はじめに」で触れた「専門教育を受けるのに必要な学問的な基礎を修得」²⁾するのには、本授業は一定の役割を果たしていると認めていただければまいか。

3.2 自由研究レポート

次に、夏休みを利用して課した自由研究レポートに移る。学生たちにとっては、初めての日本史の研究レポート作成であり、実際のところ、出来にバラツキがあったことは否めない。しかしながら、見るべきものを提出した者もあり、平素の授業の成果が現れてきていることは間違いない。今回作成されたレポートのテーマを整理すると下表ようになる。

歴史上の人物	51
人物を通した時代の追究	26
地元の人物・歴史	16
歴史上の事件	12
歴史上の制度・社会等	8

日本の文化	7
歴史上の謎に挑む	6
専門と関わる歴史	5
日本人の意識	3
合計	134

「歴史上の人物」が最も多いのは、やはり取り組みやすい題材だからであろう。だが、単に人物をまとめるのみならず、「人物を通した時代の追究」にまで及んでいる者たちは、2.1で述べた「ある事柄を通して時代の諸相を探るといふ奥行きのある視座」を習得した結果がここに現れている。また、「歴史上の謎に挑む」というのは、主体的に歴史の学習に取り組む姿勢を示しており、「覚える」だけの歴史学習から完全に脱却しているといえよう。

では、レポート作成を通して学生たちが得た知見の中から、抜粋して掲げてみる。

「教科書に数行しか載っていない歴史は、沢山の要因が絡み合った複雑なモノであることを確認した」

「過去のことだけではなく思わぬところから自分を省みれてよかったと思う」

「敗者の立場になってみれば別のモノが見えてくる。意外とオモシロイものだ」

「学問というものは、これから先の時代が必要とされるものを学ぶことだと思う。過去から学ぶこと。生きていく上で必要なことを学びとること。心の在り方を学ぶこと」

なお、歴史教育の立場からは、「地元の人物・歴史」「日本の文化」「日本人の意識」というテーマも見逃せず、これがきっかけで歴史や文化に対する関心が高まり、社会における歴史学の果たす役割もまた高まるよう期待したい。そういう意味では、今回、自宅近くの遺跡を調べた学生から、こんな意見が出てきたのは喜ばしい。

「ほとんどの遺跡は工場が建つなどして消えてしまった。こんなにすばらしい遺跡なんだから、史跡公園でもつくってほしかった。お金がかかるけれど、それが子供の教育になると思う」

さて、高専教育の観点に戻ると、「専門と関わる歴史」に興味を沸くのではなかろうか。そこで、具体的にどんなテーマでレポートを出してきたのかを以下に示したい。

○機械工学科

「鉄砲伝来とその後」(技術的革新を歴史的に考察)

「日本の航空史」(航空技術の歴史を考察)

○物質工学科

「納豆について」(食品化学的テーマの歴史的考察)

○環境都市工学科

「日本の城」(歴史的建造物から時代背景を考察)

「足尾銅山鉱毒事件」(環境問題の歴史的考察)

それぞれ自らの専門と結びつけた関心からテーマを設定していることがおわかりになる。日本史学の専門教育を受けているわけではないので、日本史学研究レポートとしては改善の余地があるが、独自の視点をもって取り組んでいる点、高専3年生のものとして注目に値する。なぜなら、それは研究に対する取り組みとして生かされ、専門においても独自の視点をもった研究が予想できるからである。

さらにいえば、日本史と専門とを結ぶベクトルを有す彼らは、他分野への目配りができる意識と広い視野をもっており、様々な分野への応用が可能となるに違いない。すると、他人には真似のできないベクトルの発信を行い、独創性のある仕事に結びつけることが期待できる。創造力の育成は何も専門科目に限られるわけではなく、多面的なものの見方・考え方の習得を通して、一見無縁に映るかもしれない日本史教育もまた貢献できるのである。

3.3 前期末試験における小論文

前期末試験は、前述のように、知識力を問う形式と論述式の混合で行った。このうち論述式の問題は、与えられた3つのテーマから1つを選び、小論文を作成するというものである。では、実際にどんな内容が出てきたかを以下に示す。

1. 東北の歴史と中央の歴史	62
中央との差異を見出す視点	21
歴史を学ぶ再発見	16
中央との共通性・連関性を見出す視点	12
東北の独自性等の再発見	11
感想	2
2. 人物を通した歴史	36
当事者への着目と考察	12
人間のあり方に対する歴史的考察	7
方法論の会得	6
感想	6
歴史を学ぶ再発見	3
身近なところに見出す歴史的痕跡	2
3. 歴史から学ぶ現代社会	43
今日の状況に対する歴史的考察	21
人間のあり方に対する歴史的考察	8
感想	5
身近なところに見出す歴史的痕跡	3

伝統・文化に対する再認識	3
歴史を学ぶ意義	3
合計	141

表中の太字が与えられた3つのテーマで、その右の数字が選択者の数であり、右寄せの欄がそれぞれのテーマに対する論述内容とその内数である。この結果からいえることを分析してみよう。

1のテーマを選んだ者たちは、異なる角度からものを見て考えるという思考力を身につけたことになろう。それまでバラバラにとらえていた東北の歴史と中央の歴史に接点を見出し、共通性・連関性あるいは差異・独自性という発見をしている。共通性・連関性に注目した者は、一地域の出来事であっても必ず他地域とのつながりがあることを改めて認識したわけであり、これを現代に移した場合、国際的視野への発展が期待できる。一方、差異・独自性に注目した者は、全体の中で独自性を意識する見方・考え方を発現できるようになるだろう。

2と3のテーマに関しては、歴史的なものの見方・考え方を駆使した論述である。人間のあり方や現代社会などについて、いわば「温故知新」から自分の考えを記したものと見える。その成果を何人かの記述から引用してみると、「自分たちの使っているものは、1つ1つが長い歴史を経て生み出された知恵のかたまりだ」という認識をもたらし、「緊迫感を持ち切磋琢磨し合って生きる」という意識を芽生えさせ、「人にあわせてばかりでなく自分の意見を持つとうと思った」という自覚を生み出している。

前期末の段階でこうした結果を全員が手にしたわけではなく、後期に1人でも多くの学生が習得できるよう指導していくのが課題である。だが、本授業を受ける前の彼らの実情を鑑みるならば、前期における実践に一定の評価を与えることが許されよう。高専における日本史教育の方法としては有効なものであるとおきたい。

3.4 自己評価レポート

後期授業の初回にあたり、前期を振り返って学生自身が自分の理解度を点検するレポートを課した。これまで述べてきたように、試験や自由研究レポートを通し、教える側として到達度を測ってきたわけだが、学ぶ側の自己認識を確認するの必要があり、またそれは改めて本授業の意味を考えさせることにもつながる。そこで、前掲の授業概要にある単元と学習目標を提示し、各々についてどんなことを学んだか、あるいは試験やレポートで活かされたところなどについて自己分析さ

せた。

その結果、後述のような自己認識を有した回答を得られたものの、自己分析という行為そのものができない、もしくはその意味がわかっていない例があった。文面を見ていると、授業内容の理解云々以前に、精神的な未熟さが見受けられ、精神年齢の差としてとらえるべきことと思われる。これは理解力や思考力にも関わっており、「与えられたことをこなす」段階にとどまっている学生とも見える。精神的成長に個人差がある年代だけに、こうした例にあたるのは致し方あるまい。

では、個々の単元について列挙するのではなく、それらを踏まえたうえで後期の抱負を書かせた部分から、注目できる回答を挙げていきたい。

○能動的学習

- 「自分の考えや意見をもったいぶらずに発言する」
- 「疑問をぶつけた上で進める授業なので、理由などを考えながら勉強する」
- 「自分でその回その回のテーマを見つける」
- 「自分なりのイメージと全体像でとらえる」

○思考力の向上

- 「別の視点で考えを発展させる能力を養う」
- 「出来事に対して自分で考える力を養う」
- 「論理性を身につけ人に伝わる文章を書く」

○物事の追求

- 「歴史も他の教科と同じで、疑問に思うことや、自分でそこ（結論＝筆者補）にたどり着くまでの過程を自分自身で調べ進めることが大切」
- 「出来事が起こった本質を見抜けるような勉強」
- 「教えられたことは、より深く追求するために自分でも調べる」
- 「歴史的背景をつかみ物事の起源を見つける」
- 「広く浅くではなく、できるだけ深く知る。1人の人、1つの事件についてこだわる」

○身近な事柄への接点

- 「歴史が積み重なって今があることを考える」
- 「歴史の流れと現代への影響を考え、将来のことを考える」
- 「日本人として、東北人として、秋田人として知っておくべき歴史を忘れない」
- 「(どんな時代であれ＝筆者補) 秋田との関わりなどに興味を持って勉強する」

これらを眺めると、前期の授業を経験し、学習における自分の課題を自覚しながら取り組もうとする姿勢が看取できる。たとえば、こちらで設定している各授業のテーマを自分で見つけようとしたり、視点を変える思考力を自ら意識して養おうとしたりする意欲は、

高く評価できるものである。また、自分の力で結論や本質に至ろうとする探求心や、物事を深く追求しようというこだわりは、彼らにとって今後の研究活動になくはならないものだろう。かかる姿勢は、本稿の標題として掲げている「創造的学習」そのものであり、専門教育を受ける際に求められる「創造力」の原動力になるものと考え。また、自己分析を経て生み出された抱負であることから、自己を客観化する能力を有していると評価でき、自らの資質向上を自らなし得る学生たちだといえよう。今後の成長が楽しみである。

おわりに

高専教育において、日本史教育は、大まかにいって2つの面から大きな役割を果たす。

1つは、歴史的なものの見方・考え方を身につけ、物事を多面的にそして俯瞰的にとらえ、中・長期的視野から解決法を考える能力を養う。これが、課題解決のための素養を育み、新しいものを生み出す過程に必要な要素を加え、ひいては創造力の向上につながる。つまり、創造力を下支えする柱の1つとしての位置づけが可能だと考える。

いま1つは、時代の流れをとらえる力を養い、社会へ出てから世の中の流れや方向性を察知する能力をつけることである。身につけた技能を社会で生かせなければ、たとえ創造力豊かな技術者であっても宝の持ち腐れとなろう。広い意味でいえば、自分の能力を発揮できる環境を自ら整えることもまた、創造力の要素の1つとしてもよいかもしれない。時代の変わり目に生きている今日こそ、歴史的視点の重要性が増している

といえるだろう。

そういう意味では、昨今、話題となっているJABEE（日本技術者教育認定機構）の示す教育認定基準³⁾に、歴史的視点からの要素が見当たらないのは残念である。国際化への対応が主眼となっているのはよくわかるが、異文化コミュニケーションにとっても歴史的背景を踏まえた理解は重要であり、そうした素養の習得を国際的人材育成の要素に加えるべきだったのではなからうか。また、技術者倫理を考える際にも、歴史的視点からの検討は有効な方法の1つであり、本稿で論じてきたような日本史教育の役割は、多方面で援用されるべきものであると考える。かかる指摘を最後に付すことをお許しいただきたい。

本稿を通し、日本史教育もしくは日本史学習に対する大方の理解を得られれば幸いである、

-
- 1) 平成14年度『国立秋田工業高等専門学校要覧』。
 - 2) 1)と同じ。
 - 3) 「2002年度版日本技術者教育認定基準」基準1 学習・教育目標の設定と公開（JABEEホームページ掲載）。

〔付記〕

本稿の概要は、平成14年11月28～29日に開催された「平成14年度国専協主催東北地区高等専門学校教官研究集会」において、同じ題目の研究発表として報告した。質疑応答でご質問ご意見を出してくださった方々に感謝申し上げたい。